

社会的態度の基礎的研究

久 松 昌 範

従来の態度の研究は、アプローチのしかたによって、おおきく2つに分けられる。即ち、Thurstone, Eysenck らの因子分析的研究(態度間の静的構造の研究)と Sherif, Rosenberg らの変容過程の研究(態度内の動的構造の研究)である。日本においても、これら2つの流れにそった研究、あるいは、2つのアプローチを統合しようとする意欲的な研究が、島田(1963)、田中(1964)、原岡(1965)、鮎戸(1965)、久松(1962)などによってなされてきたが、なお、多くの問題が残されている。特に、態度を、現実的、具体的な問題によって、全体的、統合的にとらえようとする研究が、今後の態度研究においては、最も重要な仕事であると考えられるが、一方、それぞれの流れにおける微細な実験的研究、探索的調査も、同時に必要である。ここに報告する実験は、後者の流れに属するもので、基礎的な諸点について、探索的実験をおこなったものである。

I 理論的前提

態度の理論的な概説はすでに別稿でおこなったので(久松, 1966)、ここではIIに述べる仮説に必要な部分だけを要約する。態度の定義、構造に関連して、筆者の立場は、態度を行動への反応傾向、行動予測のための態度という観点強調する。従って、態度内構造を考える場合、「感情」〔A〕、「信念」〔B〕、の他に「適応」〔C〕の3つの components を考え、次のように定義する。〔A〕には feelings (好き←→きらい、快←→不快) や emotions の表現、非合理的反応、明らかな偏見などが含まれる。〔B〕には、理性的判断(よい←→わるい、正しい←→間違い、など) 合理的反応がすべて含まれる。〔C〕には、自己および自己に関係の深い人あるいはグループの利害を中心に

判断する適応的反応がすべて含まれ、利←→害、損←→得という次元にかかわるものである。これら3つの components が、ある対象に対して、それぞれの位置をもち、それらが統合されて、尺度上(好意的←→非好意的)のある立場での行動傾向となって収斂すると考えられる。この場合、状況の要因が、行動の場全体に作用することはいうまでもない。次に、態度には、好意的←→非好意的という「方向」の次元と、持続的かそうでないかという「強さ」の次元が考えられる。

これまでの研究では、態度の位置が両極へゆけばゆくほど変りにくい(いわゆるUカーブ)ということがいわれている。(Hovland, C. I. et al. 1957) さて、態度の構造は各個人によって、かなり異なるであろうと考えられるが、その差違を、広い意味での社会的性格としてとらえることもできる。即ち、情報構造が単純(ただ1つの component しかなく、情報も少ないような場合)であるか、複雑(3つの components が分化し、統合されているような場合)であるかということや、重さWのヒエラルキーの作り方(例えば、〔A〕〔B〕〔C〕のどれを dominant に作用させやすいか、どのような情報を重要なものとするか、など)から、個人による相違が生じるのである。これらがかなり持続的であり、個人の行動様式を決定する重要な要因であることから、社会的性格として考えることは、有効なことだと思われる。しかし、この社会的性格は、後天的な学習によって形成されたものであり、不変なものでないということは、いうまでもない。ここで「情報」という場合、一般に、意味又は論点を一つ含み(+)または(-)に価値判断された unit のことであり、「重み」Wは、主体によって心理

的に与えられた unit の重要性のことである。態度の形成過程と変容過程とは、本質的に同じ過程と考えられる。態度は主体の種々な経験によって獲得される情報によって形成され、それまでもっていた態度は、程度の差はあっても、なんらかの修正を受ける。また、(+) か (-) のどちらかにかたよった情報が多くなればなるほど、態度はゼロ点から、いずれかの極へ構造化されると考えられる。そして、いくつかの重要な (Wの大きい) 情報が Anchors となって安定した構造を形成する。態度測定に関しては、測定されたものが、あくまでも行動を予測できるものであるという前提を満たすものでなくてはならない。従って、筆者の構造理論からいえば、〔A〕〔B〕〔C〕の3つの components の反応傾向と、それらの統合されたものとしてあらわれる行動傾向をともに測定することにより主体の行動がより正確に予測されると考えられる。もちろん行動の場における客観的な状況要因は、前もって調査される必要がある。

II 探索的仮説

(a) 態度の方向 (Position) と強さ (Intensity) の関係：一般に態度の方向が極端なものほど、変化しにくいといわれるが、変化をゼロ point を越えて反対の方向へゆくというように規定すれば正しいであろうが、1 point でも動くことを変化と規定すれば、一概に正しいとはいえないであろう。なぜならばゼロ point から離れていずれかの方向へゆくということは、(+2) から (+1) へ、(+1) から (0) へのように同じ dimension の中での移動、あるいは、あいまいなゼロ point へゆくことにくらべて、かなりむずかしいことだと考えられる。

(b) 態度の Position と情報量との関係：前にも述べたように、〔A〕〔B〕〔C〕の components を経て、態度が行動傾向として一本の尺度で測定された場合、その両極の近くにいるものは、ゼロ point 近くにいるものよりも態度が構造化され安定していると考えられる。それは、〔A〕〔B〕〔C〕のカテゴリーおよび

情報の sign (+ or -) をこみにした情報量の多さともいくぶん関係すると考えられる。なぜなら、少ない情報量では、態度の Anchor となるものはみつげにくいからである。従って、Anchor としての〔A〕〔B〕〔C〕のカテゴリーの数も両極のものほど多いということは、充分考えられることであろう。

(c) 態度の Intensity と情報量との関係：一般に情報量の多い少いだけによって、態度の強さを規定することはできないであろう。情報量の多少は、確かにある程度まで態度の強さに影響を与えると考えられる。特に態度の対象がほとんど〔B〕の次元だけにかかわるような場合には、大きな影響を持つであろうと思われる。しかしながら、この実験で用いるような対象 (傷痕軍人に金を与えること) では態度の Anchor するカテゴリーが3つにわたるであろうし、特殊な経験による大きな重みをもつ情報も入る可能性がある。さらに変化を与える刺激と主体の持つ Anchor との対応関係によって、変化は大きな影響を受けると考えられる。従って、情報量の多少だけによって、変化に差がみられるとは考えられないであろう。

(d) 態度の Anchor (情報 or カテゴリーの dominant な拠点) と変化を与える刺激との対応関係：態度は、そのよって立つ Anchors を破壊されたとき、大きく変わりやすいといえる。従って、態度変化の研究では、変化を与える刺激の範疇と態度の Anchors の範疇が対応するかどうかということが重要な問題となる。この問題を解明するために実験が計画された。態度の Anchors のカテゴリーは、筆者の定義にしたがって〔A〕〔B〕〔C〕の3つが考えられる。それに対応して、変化を与える刺激も A', B', C' の3つが考えられる。実験の仮説はつぎのようになる。A' の刺激を受けると〔A〕の Anchor を持つ被験者は、〔B〕又は〔C〕又は〔B〕〔C〕Anchor を持つ被験者よりも大きく変化するであろう。それを A' :〔A〕>〔B〕 or〔C〕 or〔B〕〔C〕と表現すれば、B' :〔B〕>〔A〕 or〔C〕 or〔A〕

〔C〕, C' : 〔C〕 > 〔A〕 or 〔B〕 or 〔A〕
〔B〕となるであろう。また、刺激と対応する
カテゴリーを含む二種以上の Anchors を持つ
被験者の変化は、変化の大きいものと小さいも
のの中間に位置し、そのいずれとも差はみられ
ないであろう。なぜならば、Anchors の中で
変化の効果が相殺されるからである。

以上の四つの仮説を検証するために実験が行
なわれた。

Ⅲ 実験の方法と手続

①予備調査……本実験では被験者を多く必要と
するので、質問紙法が適当であると考えられ
た。被験者の持っている情報の測定には、自由
筆記方式 (free-writing method) を用い、行
動へ収斂する態度の尺度は 7 point の評定尺
度が用いられた。評定尺度使用の理由は、便利
なだけではなく、自由筆記の前には、実験者が
できるだけ情報を与えないようにするという積
極的な理由があるからである。topic は被験者
の情報内容に〔A〕〔B〕〔C〕3つの com
ponents がともに入るようなものという基準の
もとにいくつかのトピックを考え、結局次の
topic が用意された。「街で募金している白衣
の傷痍軍人に出会ったら、お金をあげようと思
いますか」被験者は本実験で用いられる京都市
内K中学の2年生(男女)2 class (計100人) 全
員が対象とされ、K中学の好意により自習時間
を借用して、50分間にわたっておこなわれた。
1 class については2日後にさらに同じ調査が
行なわれた。

②予備調査の結果…… free-writing method
によって、情報の量の測定および、そのカテゴ
ライズが充分可能であることが確認された。実
験後の影響が一番少ないと思われる「傷痍軍人」
の topic が選ばれた。本実験でも使用する評定
尺度の信頼性を検討するため、test-retest の相
関とピアソンの相関係数で求めた結果、充分高
い相関とはいえないが有意な相関がみられた
($N=47$, $r=0.294$, $CR=1.995$, $p<0.05$)

③変化刺激としての Message A' B' C' の作
成……予備調査による中学生の意見と大学院学

生5人の意見を参考にして、筆者の〔A〕〔B〕
〔C〕の定義を基準にして(資料1, 2, 3)
のような3種類の Message が作成された。全
く〔A〕だけ、全く〔C〕だけという Message
を作ることは不可能であったので、それぞれ
〔A〕 or 〔B〕 or 〔C〕が dominant な Mes
sage として作成された。また、説得力あるい
は unit の数を等しくすることも不可能に近い
ので、字数(被験者が読む時間)だけではでき
るだけそろえた。これらの Message の妥当性を
検討するために10人の大学生に、〔A〕〔B〕
〔C〕の定義を与えて判別してもらった結果、
10人とも筆者と同じ判別を行なった。

④本実験の手続……被験者は予備調査と同じK
中学2年生(男女)13 class (計648名)。実
験は1962年12月前後5日間にわたり、自習時間
を借用して、心理学教室の大学院生T兄と筆者
とが行なった。A', B' の Message はそれぞ
れ4 class に、C' の Message は5 class に
任意に与えられた。最初10分間は、中学の先生
による実験者の紹介、出欠の点検に費やされ
た。その後、予備調査と全く同じ調査用紙(資
料4)が配布された。氏名、性別を書いたこと
を確かめたのち、資料に書いてあるようなイン
ストラクションを行ない、自分の態度を尺度上
に評定させ、その理由を10分間書いてもらっ
た。マス目を引いておいたのは、字数の制限を
するためではなく、書きやすくするためであ
る。「書き始めて下さい」の合図から10分間た
ったら、直ちに用紙が回収された。回収終了と
ともに、今度は Message が配布された。Mes
sage はある大学の学生の意見をまとめたもの
で参考にするようにと云って与えられた。まず
最初に、実験者が声を出して読み、その後、3
分間ほど被験者は自分で読む時間を与えられ
た。3分間がすぎたら、実験者はもう一度声を
出して読み、被験者は配布された Message を
一緒に黙読するよう指示された。その後、Mes
sage の用紙はそのまま手もとに置かせたまま、
2回目の態度調査が行なわれた。同時に前と同
じように10分間理由を書いてもらった。これは

真面目につけたかどうかのチェックのためである。10分間経過したら、質問紙と Message がともに回収された。これは後日行なわれる別の class へ Message が流れないようにするためである。回収が終わったのち、情報の悪影響を防ぐため、つぎのような Message が口頭で与えられた。「別の大学で、同じような調査をしたところ、今皆さんに読んでもらいました意見とは全く反対の意見の人がたくさんいました。たとえば、戦争にいやいやひっぱり出され片輪になっても、国は十分な援助も与えず、また一般の人々は街頭で募金をすることを非難さえしている。これでは、傷夷軍人はほんとうにかわいそうだ。だから、おおいにお金をあげようと思うというような意見もありました。ですから、大学生全部がさきほど読んでいただいた意見とは考えないようにして下さい。いろいろ違った意見を持った人がたくさんいるわけですからね。」この Message の反応を「私のいうこと、わかりますね」といって確かめ、実験の協力で感謝して、実験は終わった。

(資料1) message [A']

「街頭で募金をしている白衣の傷夷軍人を見ると戦争のきずあとを見せつけられるようで、不愉快になる。あまりうまくもないアコーデオンやギターをひいて、お金をもらおうとするのは虫がよすぎるように思う。楽しい旅行をしている時や、名所、旧蹟をまわって楽しい気分している時などに、よくああいう人が募金をしている姿を見かけるが、そのたびに、折角の楽しい気分がこわされてしまって不愉快なおもいがする。ああいう人を外国の観光客に見られたら、日本の恥さらしだと思う。又あわれそうなかっこうをして、同情を求めるのは見苦しいことだし、そういうのを見せつけられると、同情する気は殆んど起らなくなってしまう。第一、人にお金をめぐんでもらおうという心がいやなかんじである。とにかく、白衣の傷夷軍人が街頭で募金をしていても、お金を出そうとは思わない。」

(資料2) message [B']

「傷夷軍人には、恩給や生活保護、就職の世話などで、国がめんどうをみるべきであるし、事実或る程度そうしているのだから、街頭で募金をしている傷夷軍人にいちいち同情してお金を与える必要はない。又、

逆に、そういった同情が、そのような人達のまじめに働こうとする気持を弱め、よい職業がみつかっても働く気を起こさなくさせると考えられる。だから、安易な同情からお金を出すことは、募金している傷夷軍人のためにはよくないことである。

世の中には、戦争のために犠牲になって、苦しい生活を余儀なくされている人達が、傷夷軍人のほかにもたくさんいる。そういう人達はまじめに働いているのだから、募金をしている傷夷軍人でも、働こうとする気持さえあれば、街頭募金をしなくても生活していけるはずである。傷夷軍人だからといって戦争のきずを売りものにするのはたいへん、間違っている。」

(資料3) message [C']

「戦争が終わって17年もたつのに、まだ街頭に立っている白衣の傷夷軍人にお金を出すのはつまらない。一寸見ると、気の毒には見えるけれど、本当は国がいろいろ援助していて、僕達よりお金を持っているかも知れないのに、お金をあげたりするのは損だと思う。あげるようなお金があったら自分の好きなものを買うほうがいいし、そのほうが楽しい。第一、僕達学生は自分のものを買うだけでせいっぱいなのに、国が援助している人にお金をあげる必要はない。もっと自分の役に立つような使い道がいくらでもあるはずである。とにかく、いちいち同情してお金をあげているときりがなくて、結局、自分が無理をしてまでお金をつくらなくてはならなくなるし、又、偽の傷夷軍人もいると聞くので、もし、そんな人にお金をあげたとしたら、全く損をしたことになる。だから、お金を持ってもそういう人にあげることはせず、自分の役に立つように使うのが一番いいと思う。」

(資料4) 第一回目の態度調査

_____ 中学 _____ 年 _____ 組

なまえ _____ 男 女

これから、皆さんに、いろいろ意見を書いていただくわけですが、これは試験ではありませんし、学校の先生にも見せませんから、思ったまま、正直に書いてください。友だちののみたり、相談したりしてはいけません。

記入のしかた：あなたの意見にいちばんびったりするところに○印をつけ、その理由をできるだけたくさん書いてください。理由を書く時間は10分間です。書くところがなくなったら、うらに書いてください。

街で募金している白衣の傷夷軍人(戦争で負傷し

た人)に出会ったらお金をあげようと思いますか。

そ 非 常 に 思 う	そ か な り 思 う	そ や や 思 う	い ど ち ら な い と も	う あ ま り 思 わ な い	う ほ と ん ど 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い

Ⅲ 実験の結果と考察

(a) 態度の方向 (Position) と強さ (Intensity) の関係。

評定尺度は、間隔尺度を仮定し、「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までに7点から1点を便宜的に与えた。(資料5)はこの

実験に用いられた男女別及びその総計の度数分布である。A' (A'は〔A〕に対応する刺激を意味する。B', C'についても同様である), B', C'を与えられる被験者 group はいずれも正規分布を示していると考えられる。各群の男女をこみにした人数による平均値 (\bar{X}), 標準偏差 (SD) が表の下に示されている。男女の比に position によるちがいがあるかどうかをみたところ, A', B', C' いずれのグループにおいても, 明らかな差はみられなかった (いずれも $p>0.05$)。従って position ごとに男女をこみにして変化のちがいをみても差しつかえないことがわかった。

(資料5) 全被験者の度数分布

A				B				C			
性別 position	男	女	計	性別 position	男	女	計	性別 position	男	女	計
7	7	6	13	7	8	6	14	7	7	5	12
6	19	15	34	6	15	9	24	6	19	11	30
5	26	20	46	5	25	21	46	5	30	25	55
4	18	27	45	4	22	12	34	4	23	23	46
3	21	16	37	3	21	25	46	3	29	25	54
2	4	3	7	2	10	8	18	2	13	18	31
1	11	7	18	1	7	10	17	1	14	7	21
計	106	94	200	計	108	91	199	計	135	114	249
$\bar{X} = 4.24$ SD=1.60				$\bar{X} = 3.99$ SD=1.69				$\bar{X} = 3.89$ SD=1.61			

態度の強さ (変化に対する抵抗力) は position により有意差があるという仮説を検証し

たのが (資料6) である。

(資料6) position による変化の差

1点でも変化したもの							3以下への変化							
position 変化	7	6	5	4	3-1	総計	position 変化	7	6	5	4	3-1	総計	
不変	9	15	25	30	59	138	[A]	不変	12	30	34	30	60	166
変	4	19	21	15	3	62		変	1	4	12	15	2	34
計	13	34	46	45	62	200	計	13	34	46	45	62	200	
$X^2 = 34.4086$ P<0.01							$X^2 = 20.999$ P<0.01							
④と(3-1) P<0.01							⑦⑥と(3-1) P>0.05							
⑦と(3-1) P<0.05							⑤と(3-1) P<0.01							
④——⑦ P>0.05							④——⑦ P>0.05							

社会的態度の基礎的研究

1点でも変化したもの

position 変化	7	6	5	4	3-1	総計
不変	6	7	6	11	77	107
変	8	17	40	23	4	92
計	14	24	46	34	81	199

$X^2=48.25$ $P<0.01$
 ⑦と(3-1) $P<0.01$
 ⑤と⑥ $P<0.10$
 ⑤と④ $P<0.05$
 ⑤と⑦ $P<0.05$

3以下への変化

position 変化	7	6	5	4	3-1	総計
不変	9	15	19	11	79	133
変	3	9	27	23	2	64
計	12	24	46	34	89	197

$X^2=67.428$ $P<0.01$
 ⑦と(3-1) $P<0.01$
 ⑦と⑤ $P<0.05$
 ⑥と④ $P<0.05$
 ⑦と④ $P<0.05$
 ⑤と⑥ $P<0.10$

[B]

1点でも変化したもの

position 変化	7	6	5	4	3-1	総計
不変	2	10	20	18	103	153
変	10	19	35	28	4	96
計	12	29	55	46	107	249

$X^2=98.084$ $P<0.01$
 ⑤④と(3-1) $P<0.01$
 ⑦-④ $P>0.05$

3以下への変化

position 変化	7	6	5	4	3-1	総計
不変	5	20	30	18	106	179
変	7	9	25	28	1	70
計	12	29	55	46	107	249

$X^2=16.373$ $P<0.01$
 ⑤と(3-1) $P<0.01$
 ⑦と⑥ $P>0.05$

[C]

◎ 1点でも Message の方向へ動くことを変化と規定した場合。

A', C'では、当初から Message の位置にいたグループとの間には有意な差があるが、position 7 から position 4 の間では、有意な差はみられなかった。B'では、当初から Message の位置にいたグループとの間にはもちろん差がみられ、更に position 5 と position 7 及び position 4 の間には有意差がみられ、position 5 と position 6 の間には差がみられず、結局、position 5 がその他の position にくらべて変りやすいことが明らかにされた。

◎ position 4 (または通常ゼロ point) を越えて Message の方向へ動くことを変化と規定した場合。

A'では、position 7 と当初から Message の位置にいたグループの間には差がなく、その他の position 6, 5, 4, と当初から Message の位置にいた群との間には有意な差がみられた。また、position 7 から position 4 の間では、有意差は明確ではなかったが、その傾向は

みられた ($p<0.10$)。

C'では、当初から Message の位置にいた群と、その他の群の間には有意な差はみられたが、position 7 から position 4 の間では有意な差があるとはいえないがその傾向がみられた ($p<0.10$)。

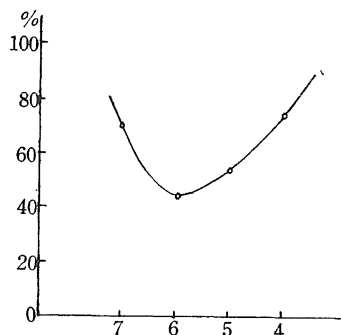
B'では当初から Message の位置にいたグループと、その他の position のもの間には差がみられた。更に position 4 と position 6 及び 7, position 5 と position 6 の間には有意ではないが、一応の差がみとめられ ($p<0.10$)、position 5 と position 7 の間には明らかに差がみられた。その他の間には差があるとは云えなかった。

以上の結果をグラフに書いたのが(資料7)である。このグラフから、次のような考察が可能である。(資料7参照)

◎ 1点でも動くことを変化と規定した場合。

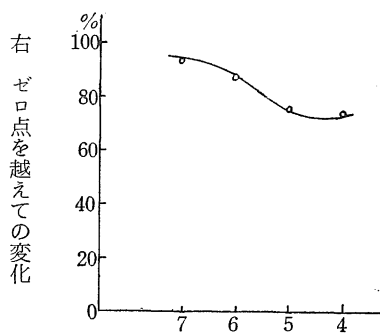
A'では position 7 および position 4 にくらべて position 6 が変りやすい傾向がみられ

(資料7) Position と Intensity (変らなかったものの%を示す。)
(7, 6, 5, 4はposition)

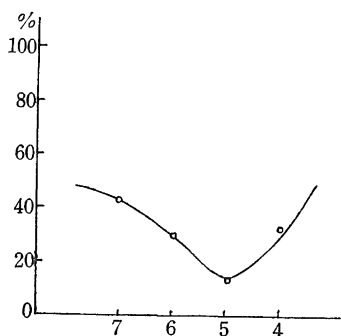


左
一点以上の変化

[A]

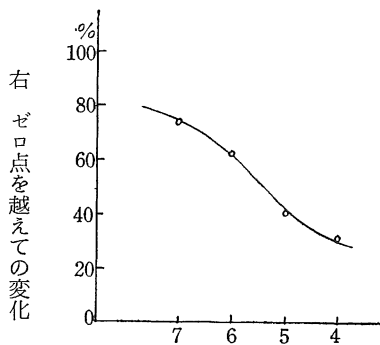


右
ゼロ点を越えての変化

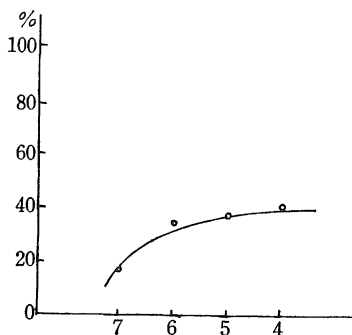


左
一点以上の変化

[B]

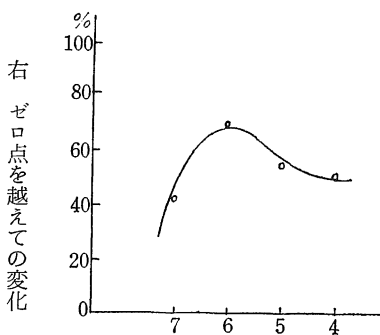


右
ゼロ点を越えての変化



左
一点以上の変化

[C]



右
ゼロ点を越えての変化

る。

B'では position 7 および position 4 にくらべて position 5 が変わりやすい。

C'でははっきりとはいえないが、position 7 が position 4 にくらべて変わりやすいということを示唆しているように思われる。

◎ ゼロ point を越えることを変化と規定する場合。

A', B'では共に極端なほど変化しにくい傾向があるといえる。C'では最も極端なものは

逆に変化しやすくなり、それ以外は、A', B'と同じ傾向を示すと考えられる。一般に、与えられる Message を無視して一概にUカーブを描くとはいえないことが示唆されたのであるが、他方、どのような Message を受けても position 4 は常に変化しにくいという一般的仮説を立てることが可能である。

(b) 態度の Position と情報量との関係

情報量の定義……言葉で記述されている場合に、意味、或いは論点の単位でくぎられる unit

のことで、それは、単語や節である場合もあるし、また長文である場合もある。

被験者の持っている情報（自由筆記によって得られるもの）は、この定義に従って数えあげられ、構造図式の中へ分類記入されることによって、その被験者のもつ態度の構造が明らかに

されるのである。

このような内容分析によって情報量と情報内容の分類をするには、或る種の客観的信頼性及び妥当性の保証が必要である。そこで(資料8)に示される判定基準によって position 5 からランダムに選んだ52人の被験者の記述した情報

(資料8) 情報の分類判定基準表

・質問紙を一読して下さい。次に判定記入用紙を見て下さい。

・(+)、(-)とは傷夷軍人に対して、或いは傷夷軍人の募金に応ずることに対して、好意的(+), 非好意的(-)反応のカテゴリーである。

・〔A〕, 〔B〕, 〔C〕カテゴリーの意味

〔A〕 { 感情的反応 (気の毒だ, かわいそうだ)
 { 非合理的反応, 偏見

〔B〕 { 価値判断 (よい—悪い) ……すべきであるという義務感
 { 知的判断, (正しい—間違い) 論理的思考

〔C〕 { 自己の利害中心の反応 (損一得の次元)
 { 適応的反応。(僕があんなになったら, かなわんと思うから)

・実際のカテゴリ方法
中学生が書いている理由全部を、意味、又は論点の単位でくぎり(それは、単語や節の場合もあれば、長文の場合もある)、その unit をそれぞれ1個として、判定表の中にある6つのカテゴリー(A+-B+-C+-)のどこか1ヶ所に数値の1として記入する。どうしても記入できない unit があれば、判定表のうらに、その unit を記入して下さい。

・分類の具体例

- ・かわいそうだ、働けないし、気の毒だ。
- ・国が保障しているから出す必要はない。
- ・お金がないから、あげない。
- ・手足がなく働けないし、職もみつけにくいからかわいそうだ。
- ・国が保障しているから出す必要はないという人もあるが、私はそうは思わない。

〔A〕		〔B〕		〔C〕	
+	-	+	-	+	-
2	0	1	0	0	0
0	0	0	1	0	0
0	0	0	0	0	1
1	0	2	0	0	0
0	0	1	0	0	0

量を7人の京大生に判定してもらった。

その結果、筆者と7人の判定者との相関をピアソンの相関係数で求めたところ、すべて有意な相関がえられた。(0.84 ≥ r ≥ 0.64 p < 0.01)

また、情報内容の分類では、同様に52人について筆者と7人の判定者の一致するパーセントをもとめX²検定をした結果、筆者の判定の公共性が保証された。(X² = 26.0, p < 0.001)

さて上述した判定法によって判定された被験者の position ごとの情報量の分布は男女をこみにしたものが(資料9)に示してある。この表をもとにして情報量の多いもの(4以上)と

少ないもの(0~2)に分け、X²検定がなされた(資料10)。この分割方法は中央値による配分の誤差をさけるためと、全体の中央値がほぼその中間の3にあることによって妥当であると考えられる。結果は position 7 と position 5, 4 に有意な差がみられた。また position 7 と 6, position 5 と 4 をそれぞれ合わせたもので検定してもやはり有意差がみられた。更に position 4 と 3, position 3 と position 1 の間にもやはり有意な差がみられた。

(資料11)は、態度を支える Anchor としてのカテゴリーの数が position によってこと

なるかどうかを検定したものである。position によって Anchor となるカテゴリー数に変化があることが明らかとなった。

以上2種の検定によって、仮説(b)は実証されたわけである。情報量と position の関係をグラフに書いたものが(資料12)である。(たて軸は各 position において4個以上の情報をもっているもののパーセントである。)このカーブは態度の強さのカーブとよく似た関係にあることがわかる。

(資料9) position と情報量

position 情報量	7	6	5	4	3	2	1	計
0-1	1	6	16	6	11	2	1	43
2	9	28	37	48	36	9	11	178
3	7	20	48	35	32	19	13	174
4	12	24	29	22	32	13	13	145
5	4	4	10	8	17	6	9	58
6以上	6	6	7	6	9	7	9	50
計	39	88	147	125	137	56	56	648

(資料10) position と情報量の差

position 情報量	7	6	5	4	3	2	1	計
0-2	10	34	53	54	47	11	12	221
4以上	22	34	46	36	58	26	31	253
計	32	68	99	90	105	37	43	474

$X^2=22.49$ $P<0.01$

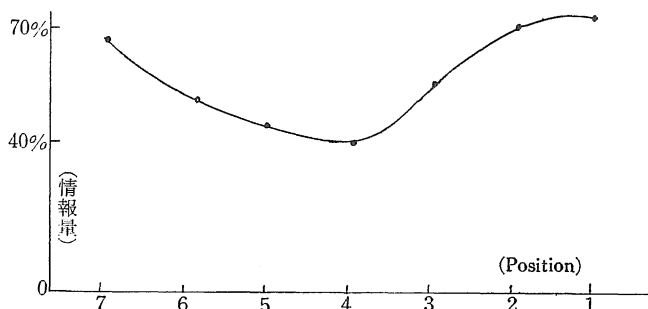
- ④と③ $P<0.05$
- ③と① $P<0.10$
- ⑦と⑤ $P<0.05$
- ⑦と④ $P<0.01$
- ⑦と⑥ $P<0.10$
- ⑥と④ } 差ナシ
- ⑤と④ } 差ナシ
- ⑥と⑤ } 差ナシ

(資料11) position と dominant なカテゴリーの数

position カテゴリー数	7	6	5	4	計
2種以上	29	54	74	19	176
1種	10	34	73	78	195
計	39	88	147	97	371

$(X^2=48.852)$ $P<0.01$

- ⑦と⑤ $P<0.01$
- ⑦と④ $P<0.01$
- ⑥と④ $P<0.01$
- ⑤と④ $P<0.01$
- ⑥と⑤ $P<0.20$
- ⑦と⑥ $P<0.20$



(資料12) position と情報量の関係 (4個以上の情報をもつものの%を示す)

(c) 態度の Intensity と情報量との関係

上にのべた (a), (b) の結果から、情報量の多さと position との関係は、態度の強さと position との関係によく似たカーブ (Uカーブ) を描くことが明らかにされた。ここで情報量が多ければ態度は強いかという問題を解明するために、まず人数が多く、統計的処理の可能な position 5 の被験者が選ばれた。次に情報量の多い少ないが男女によって異なるかどうかを検定さ

れた(資料13)。その結果、男は女よりも情報量が少ないということがわかった。次に男女によって変化の仕方に差異があるかどうかをUテストによって検定された。その結果、男女による変化の仕方の差はないと考えられる ($p>0.05$)。そこで情報量の多いもの(4以上)と少ないもの(2以下)に分け、その変化のちがいをUテストで検定した。その結果、A', B', C' いずれにも有意な差はみられなかった ($p>0.05$)。

念のため position 4 及び position 6, 7 を合わせたものでも男女による変化の仕方の差異はないものと仮定して X^2 テストを行なったがいずれの position でも、有意差は見出されなかった。

これらの結果から、情報量の多少だけが変化に影響を与えるとは考えられないことがわかる。

(資料13) 男女による情報量の差

情報量	性別		
	男	女	計
0-2 (小)	36	20	56
4以上(大)	20	26	46
計	56	46	102

$$X^2 = 4.416 \quad P < 0.05$$

(d) 態度の Anchor と変化を与える刺激との対応関係

変化の効果をみるため、同一 position のものだけを用いることが望ましい。また人数は多いほうがよいということから、position 5 の被験者が用いられた。内容分析によって position 5 のすべての被験者が分類されたが、その結果〔C〕が dominant な Anchor となっている場合が少ないのにたいし、AとBが混合しているものが、かなり多かった。そこで〔C〕の分析は別の機会にゆずり、〔A〕、〔B〕、〔AB〕の三つのグループがつけられた。変化を与える刺激は、A'、B'、C'の三つがあるわけである。従って前に述べた仮説は利用しうる被験者の制約から次のように部分的に検討されることになる。すなわち態度の変化量について、A' : 〔A〕 > 〔B〕、B' : 〔B〕 > 〔A〕となり、〔AB〕群はいずれも〔A〕と〔B〕の中間に位置し、C'については、とくに〔A〕〔B〕〔AB〕間に顕著な差をもたらしきないのではないかと予想されるのである。

これらの仮説を検証するため(資料14, 15, 16)がつけられた。男女によって変化の仕方に差があるとはいえないことがわかっているので〔A〕〔B〕〔AB〕の条件差は、男女こみで

検討されることになった。Hテストの結果、A'、B'ともに有意な差があるとはいえないが、一応その傾向があると思われる。C'では有意な差はみられなかった。筆者の仮説は、A'の刺激に対する〔A〕と〔B〕との変化の差をみることであり、またB'に対する〔A〕と〔B〕の変化の差をみることにあるので、さらにUテストが行なわれた。その結果は(資料14, 15)にみられるように、A'では5%レベルで〔A〕と〔B〕に差がみられ、B'では、10%レベルで〔A〕と〔B〕に差がみられた。すなわちA'の Message を与えられたとき、〔A〕は〔B〕よりもかわりやすく、またB'の Message を与えられたとき、〔B〕は〔A〕よりも変わりやすい傾向がみられた。従って、筆者の仮説(d)は統計的に充分有意とは云えないにしても、ある程度確かめられたわけである。

C'の message を与えられたときには〔A〕〔B〕〔AB〕の間に変化の差がみられなかったということも、A'、B'との関係において注目すべき結果である。

態度の Anchor が〔C〕である人数が非常に少なかったことについては、おもに、次のような理由が考えられる。①中学生にとって5円ないし10円を与えるか与えないかということは、たいして重要なことではなかったこと。更に②中学生が自分で金をもうけ、それを自分でつかうという現実も又、意識も薄弱なため、自己中心的利害を基準にして、思考判断するということが少なかったこと、などである。従って、実際に働いている人を対象にすれば〔C〕にカテゴライズされる人は、かなり多くみられるのではないかと考えられる。

(資料14) message A'を与えられたときの变化〔A〕

变化した position 情報	7	6	5	4	3	2	1	計
A	0	1	1	3	3	1	0	9
B	0	1	5	1	0	0	0	7
AB	0	2	8	4	5	0	1	20
計	0	4	14	8	8	1	1	36

H=4.580 C=0.925 H/C=4.95

P<0.10 (両側検定)

Uテスト

[A]と[B] U=11.5 P<0.05

[A]と[AB] U=68.5 P>0.05

[AB]と[B] U=97.0 P>0.05

(資料15) message B'を与えられた
ときの变化

[B]									
変化した position 情報	7	6	5	4	3	2	1	計	
A	0	0	2	2	2	1	0	7	
B	0	0	2	1	5	3	2	13	
AB	0	0	1	9	2	2	2	16	
計	0	0	5	12	9	6	4	36	

H=2.480 C=0.945 H/C=2.624

P<0.30 (両側検定)

Uテスト

[A]と[B] U=67.5 P<0.10

[A]と[AB] U=65.0 P>0.10

[AB]と[B] U=77.5 P>0.10

(資料16) message C'を与えられた
ときの变化

[C]									
変化した position 情報	7	6	5	4	3	2	1	計	
A	0	0	3	2	3	0	1	9	
B	0	0	5	1	1	4	3	14	
AB	0	0	9	3	3	2	3	20	
計	0	0	17	6	7	6	7	43	

H=1.0045 C=0.9299 H/C=1.0802

P>0.50

V 実験の総括

被験者の態度は、まず評定尺度と自由記述によって測定された。次に変化刺激として、大学生のMessage (A'…感情的, B'…知的, B'…自己利害の3種が、それぞれ別個の被験者に対して) が与えられ、その後、もう一度、評定尺度で被験者の態度が測定された。まず、(a)態度の構造を一応無視して、態度の position ((+)(-)の方向における位置) と Intensity (変化刺激に対する抵抗力, 変りにくさ) の関係が考察された。その結果「変化とはゼロ点を越

えて刺激方向へ動くこと」と規定すれば、A', B'の刺激ではUカーブを描き、C'の刺激ではMカーブを描くことが示唆された。又、「変化とは1点でも刺激方向へ動くこと」と規定すれば、7 point scale において、A'では(+2) position が、B'では(+1) position が、C'では(+3) position が、それぞれ変化しやすい傾向が示唆され、ゼロ position はいずれの刺激に対しても、変化しにくいという傾向が、或る程度示唆された。次に(b)自由記述を意味、論点の単位で数え、情報量とした場合、一応内容を無視した情報量と position との関係、及び、態度を支えている情報内容([A] [B] [C])の量と position との関係が考察された。その結果、いずれの場合もUカーブを描くことが示唆された。情報量の多さと態度の強さに関する分析が必要となり、まず(c)内容を一応無視した情報量と Intensity の関係が分析された。その結果、内容を無視した情報量の多さだけが Intensity を規定するのではないということがわかった。そこで、(d)態度を支える情報内容と変化刺激である Message の内容との質的な対応関係が分析されることになった。その結果、A'に対しては[A]の支持情報をもつ被験者が[B]の支持情報をもつ被験者よりも変化しやすくB', に対しては[B]が[A]よりも変化しやすく、([AB]はともにその中間にくる)、C'に対しては、[A], [B], [AB]とも変化の差がみられないことが示唆された。なお、[C]については被験者が少ないため、分析されなかった。

VI 一般的総括と今後の課題

態度の研究において、最も重要な行動の予測という視点から従来の研究においては、充分考慮されてきたとはいえない、という反省にもとずき、筆者の態度の理論は構成され、その理論的仮説の一部が実験によって検討されたわけであるが、筆者の理論に関連して、いまだ、多くの問題が残されているのである。

まず、3つの components ([A], [B],

〔C〕)の測定方法として、free writing method を用い、その統合された態度(行動)として、評定尺度を用いたことについては、それなりに充分意味のあることであったが、この方法が必要にして十分な最良の測定方法であるとは、断定できないのである。components の測定には free writing の代りに、3つの尺度を作成することも、ある程度可能であろうし、評定尺度の代りに、実際の行動観察をすることは、困難なことではあるが、示唆に富んだ data を得る可能性があるだろうと考えられる。又、実験的に〔A〕〔B〕〔C〕のグループを作り、各グループにA'、B'、C'の message を与えて、その効果をみる試みは本実験に関連して、是非、なされる必要があると考えられる。それによって、更に、本実験では不可能であった詳細な分析即ち、同じ〔A〕でも逆方向の〔A〕、〔B〕、〔C〕を含んでいる〔A〕(A⁺A⁻, A⁺B⁻, A⁺C⁻, A⁺A⁻B⁻, A⁺A⁻C⁻, A⁺B⁻C⁻, A⁺A⁻B⁻C⁻)と含んでいない〔A〕との違い、なども分析の可能性がでてくるからである。

本実験の情報量の測定に関しても、又、いくつかの問題がある。第1に、情報を持っていても、それをうまく表現することができないという要因が、スケールなどにチェックする方法よりも、より多く作用すると考えられる。この要因のコントロールについては、一応、誰にとっても困難さの程度は同じであるという前提のもとに、考慮されないことが多いが、free writing の場合は、やはり、注意すべき問題であると考えられる。第2に、情報の判定に関連して、筆者は unit に分けて分類する方法をとったが、更に別の方法も可能なわけである。unit 分類法は記述された情報がすべてこまかく分類されるという点では有効な方法ではあるが、論理の進め方、或いは、表現の仕方など、思考の本質にかゝる問題に対しては、あまり有効ではないと考えられる。表現の仕方、論理の進め方などを実際に判定することは、非常に困難なことではあるが、筆者が data を読んでいて case study 的に考えても、やはり、無視すべき問

題ではないように思われた。第3に、unit を量化する問題に関連しては、本実験では、unit があるかないかが主に問題にされたためあまり問題はなかったが、やはり、筆者の構造理論のところで述べたように、unit の重みが考慮されるべきであることがわかる。〔B〕に関しては、種々の unit がそれぞれの重みを持つとは、充分考えられるが、〔A〕〔B〕に関しては、それぞれの重みの scale 1本だけで測定することも、或いは可能なことかもしれない。いずれにしても、これらの問題に関しては、将来の研究が必要とされるわけである。態度の構造に関して、3つの components がどのような相互作用の結果、1つの行動傾向へ収斂するか、3つの components と topic を含む situational factors との関係はどのようなものか、などの問題については、わずかに Rosenberg, M. J.(1960)などの〔A〕と〔B〕の相互作用の研究があるだけで、解明さるべき、多くの問題が残されている。特に、筆者が第3の component 〔C〕として導入した「適応、自己の利害中心」については、行動予測の場合、特に重要な次元であると考えられるが、これを〔A〕〔B〕との関連で総合的に扱う研究は、今後の態度の研究を発展させるうえからも重要であると思われる。又、従来「関心度」「重要性」「ego-involvement」などの言葉で曖昧に定義され、任意に操作されてきたものを〔C〕の次元に統合することによって、更に種々の態度間の関係も考慮することによって、態度の構造図式をより明確に記述することが可能になるのではないかと考えられる。態度の3つの components (〔A〕〔B〕〔C〕)の相互作用の法則が明らかとなり、Social Character の特質の分析が可能となれば、社会的態度の研究は新たな視野を獲得することになるのである。

参考文献

- 鮎戸 弘 態度構造研究の方法論に関する諸問題
 —要因分析との関連を中心に—
 心理学評論, 1965, 9, 267~288.
 Eysenck, H. J. The Structure of Human Per-

- sonality. London : Methuen, 1953.
- 原岡一馬 態度変容に関する実験的研究,
心理学評論, 1965, 9, 213~250.
- 久松昌範 社会的態度の理論的研究
集団と行動, 1962, 7, 38~40.
- 久松昌範 社会的態度の研究
京都大学大学院文学研究科博士課程研究
論文要旨, 1966, 21~24.
- Hovland, C. I. et al, Assimilation and Contrast
Effects in Reactions to Communica-
tion and Attitude Change. J. abnorm.
Soc. Psychol., 1957, 55, 244~252.
- Rosenberg, M. J. et al, Attitude Organization
and Change. New Haven. Yale Univer.
press, 1960.
- Sherif, M. et al, Attitude and Attitude Change.
Saunders, 1965.
- 島田一男 社会心理学の基底——態度の心理学
大日本図書, 1963.
- 田中国夫 日本人の社会的態度——社会心理学的研究
誠信書房, 1964.
- Thurstone, L. L. Multiple Factor Analysis. Univ.
Chicago Press, 1947.
- この他、雑誌論文などの参考文献は非常に多いがこの報告では、理論的検討を省き実験の詳細な叙述を主な目的としたため引用文献は最小限にとどめた。